

ニ教育に関する調査研究

通常の学級における特別な支援を必要とする児童生徒への支援のあり方についての調査研

究員 天沼 翔太



- 1 研究主題
- 2 主題設定の理由
- 3 研究の目標
- 4 研究の仮説
- 5 発達障害とは
- 6 研究の進め方
 - (1) 研究の方法
 - (2) アンケート内容
 - (3) 記述式アンケートの分析内容
 - (2) 研究の経過
- 7 アンケートからわかった守山市の現状
 - (1) アンケートの回答率について
 - (2) 38項目の支援例の結果から
 - (3) 効果のあった支援として回答いただいた支援と効果のうすかった支援として回答いただいた支援について
- 8 研究のまとめ
- 9 おわりに

資料

【特別な支援を必要とする児童生徒】に対する支援例

【引用・参考文献】



教育に関する調査研究

1 研究主題

通常の学級における特別な支援を必要とする児童生徒への支援のあり方についての調査

2 主題設定の理由

小学校、中学校の「学習指導要領 総則」（文部科学省、2017）に、通常の学級には、障害のある児童生徒のみならず教育上特別な支援を必要とする児童生徒が在籍している可能性があることを前提に、全ての教員が特別支援教育の目的や意義について十分に理解することが不可欠であることが明記されている。

「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」（文部科学省、2012）によると、通常の学級の子どもで発達障害が疑われる子どもは全体の 6.5% に上る。また、「守山市発達支援システム基本方針 2021」（守山市健康福祉部子ども家庭局発達支援課、2021）によると、2019年度の本市における発達障害等により通常の学級において支援を必要とする児童生徒数は、小学校では全体の 16.8%、中学校では全体の 11.1% に上る。この結果から小中学校を合わせると約 15.0% の児童生徒が支援を必要としており、30 人学級で 1 クラスにつき 4 人以上の割合で、特別な支援が必要な児童生徒が在籍していることになる。このことから、全ての教員が特別支援教育の知識を深め、きめ細やかな指導や支援を行う必要があるとわかる。

そこで、本研究では、本市における発達障害のある児童生徒や、その可能性のある児童生徒（以下【特別な支援を必要とする児童生徒】）への授業に関する具体的な支援のあり方の調査から、その現状を把握し、今後の特別支援教育の充実に生かすこととした。

3 研究の目標

本市における発達障害のある児童生徒や、その可能性のある児童生徒への授業に関する具体的な支援のあり方の調査から、その現状を把握する。

4 研究の仮説

【特別な支援を必要とする児童生徒】への授業に関する具体的な支援のあり方について、市内教員で共有することで、今後の特別支援教育の充実に生かすことができるだろう。

5 発達障害とは

発達障害とは「自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害、その他これに類する脳機能障害であって症状が通常低年齢において発現するもの」（発達障害者支援法における定義 第二条より）と定義されている。

発達障害の特性は、発達に即して改善されるものではない。例えば、文字の情報を読み取ることが苦手な児童生徒に対して、何度も文章を読ませることで改善しようとする支援は好ましくない。児童生徒の文字の読み取りにくさをふまえて、内容を理解することができるような環境を整えたりする支援（重要な語句に印をつける等）が有効である。

6 研究の進め方

(1) 研究の方法

- ①指導講師として、びわこ学院大学 教育福祉学部 スポーツ教育学科 小西 喜朗 教授を招聘する。
- ②通常の学級の担任を対象とした今年度の授業に関する具体的な支援のあり方についてのアンケートを作成する。
- ③アンケート調査を実施し、本市における特別支援教育の現状について考察し、整理する。

(2) アンケート内容

①アンケート方法

Google フォームによるオンラインアンケート

②対象者

市内小中学校の通常の学級の担任教諭

③アンケートの質問内容

- ・所属校
- ・担当学年
- ・勤続年数
- ・【特別な支援を必要とする児童生徒】に対して行う授業に関する支援についての質問項目（選択式、37問＋中学校用質問1問）
- ・【特別な支援を必要とする児童生徒】に対して行った授業に関する効果的な支援とそうでない支援について（記述式、2問）

(3) 記述式アンケートの分析方法

アンケートには記述式で回答する項目があり、その分析方法としてテキストマイニングを採用した。テキストマイニングとは、文章を単語で分割し、それらの出現頻度や相関関係を視覚化することである。今回は、効果のあった支援として回答いただいた支援と効果のうすかった支援として回答いただいた支援について、テキストマイニングで相関関係を視覚化した図から分析することとした。

(4) 研究の経過

時	内 容	
4月～6月	研究構想の策定	・研究主題の決定と研究計画の立案 ・指導講師の依頼と委嘱
7月、8月	アンケート内容の検討	・アンケート内容の検討 ・アンケートの対象の決定
9月～12月	アンケートの手直し	・指導講師によるアンケートに関する指導助言 ・市内教員によるアンケートに関する指導助言
1月～2月	アンケートの実施 (1月31日から2月10日) アンケートの分析	・アンケートを市内小中学校に配布 ・アンケート結果の検討 ・本市における特別支援教育の現状の把握
3月	研究のまとめ	・指導講師によるアンケートの結果に関する指導助言 ・研究紀要の作成 ・本年度のまとめ

7 アンケートからわかった守山市の現状

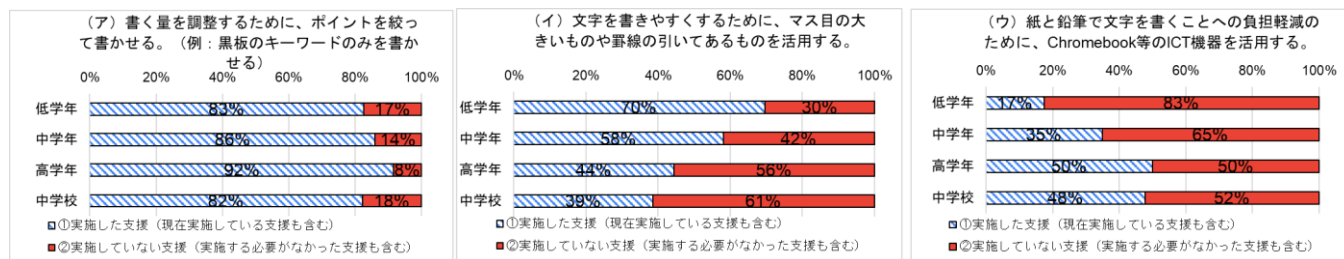
(1) アンケートの回答率について

アンケートの回収率は 63%となっている。この数値から正しい結果が測れるかどうかについてはやや疑問は残るものの、このアンケートの結果から守山市の現状について考察することとした。

(2) 38 項目の支援例の結果から

本アンケートでは「学習面でのつまずき」として、「書く」「読む」「話す」「聞く」「計算する」「推論する」の6つの観点に関する支援、「行動面・社会面でのつまずき」として、「不注意」「多動性」「対人関係」「こだわり」の4つの観点に関する支援、「ワーキングメモリ」に重点をおいた支援、「宿題や提出物（試験前のテストに関する提出物）」に関する支援の合計 38 項目の支援例について調査した。それぞれの支援について、今年度実施した（現在実施しているも含む）支援か実施しなかった（実施する必要がなかったも含む）支援かを回答してもらい、その結果からわかった守山市の現状についてまとめた。

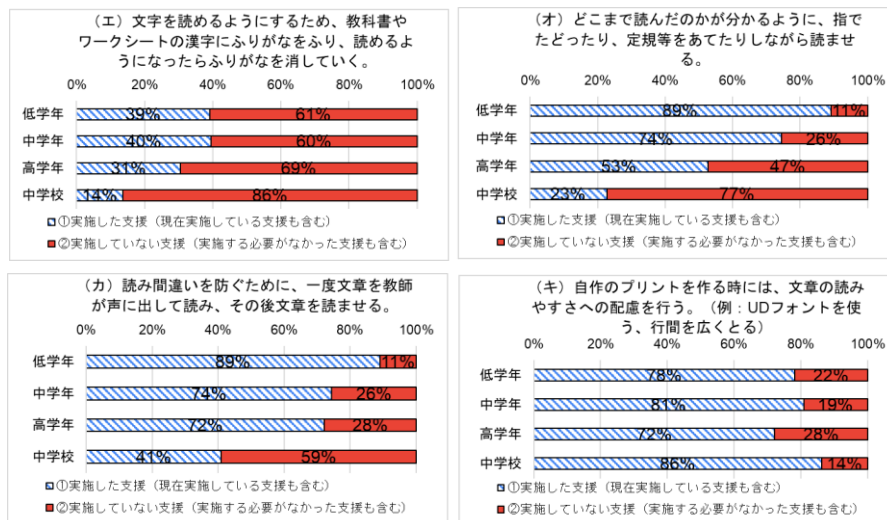
① 「書く」ことに関する支援



(ア) の支援は、全学年において有効な支援であり定着している。(イ) の支援は、学年が上がるにつれ実施率が低くなっているが、文字を書きやすくするために(イ)以外の支援を実施している可能性もある。中学校においては、支援を継続的に実施している教員が約4割いると考えられる。(ウ) の支援は、学年が上がるにつれ実施率は高くなるものの、小学校高学年を除き5割に満たない。特に低学年での実施率が低いのは、タイピングやローマ字に関する学習がなく、ICT を活用した学習の機会も少ないためと考えられる。ただ、ICT の活用は今後ますます重要となることから、低学年時より ICT を活用した支援例の共有を図る必要がある。

上記以外で実施された支援では、「なぞらせる、写させる」、「板書を写しやすくする」など他と比べて多くの支援が挙げられている。「書く」ことに関する支援効果は高く、有効であるため定着率も高いと考えられる。

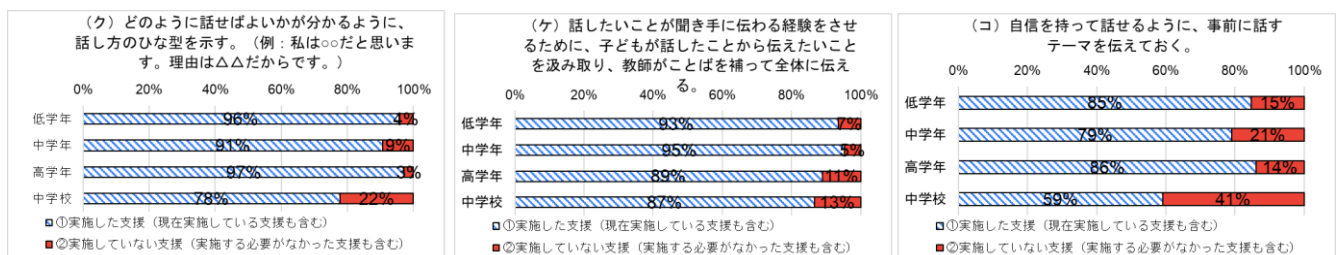
② 「読む」 ことに関する支援について



(エ) の支援は、全学年で実施率が5割に満たない。ふりがなをふることは文字を読みやすくし、安心して授業に参加することにつながる有効な支援であることを認識しておく必要がある。(オ) の支援は、学年が上がるにつれ実施率が低くなっている。音読させたり、教科書を読ませたりする機会が少なくなることが理由の一つとして考えられる。(カ) の支援は、学年が上がるにつれ実施率が低くなっているが、文章を読みとることができるよう、(カ) 以外の支援を実施している可能性もある。そのため、中学校でも文章を読むことが苦手な児童生徒に対して、音声によって内容を理解させる支援を行った教員が4割以上いると考えられる。(キ) の支援は、中学校での実施率が高くなっている。中学校においては、自作プリントを使用した学習の機会が増えることが理由の一つであると考えられる。この支援は、全ての児童生徒にとって有効であると考えられるため、さらなる支援の広がりが期待される。

上記以外で実施された支援では、「視覚支援」、「音読をさせる」などの支援が挙げられたものの、支援例は少なかった。「読む」ことに関する支援について、具体的な支援例を共有し、有効な支援を実施することが重要であると考えられる。

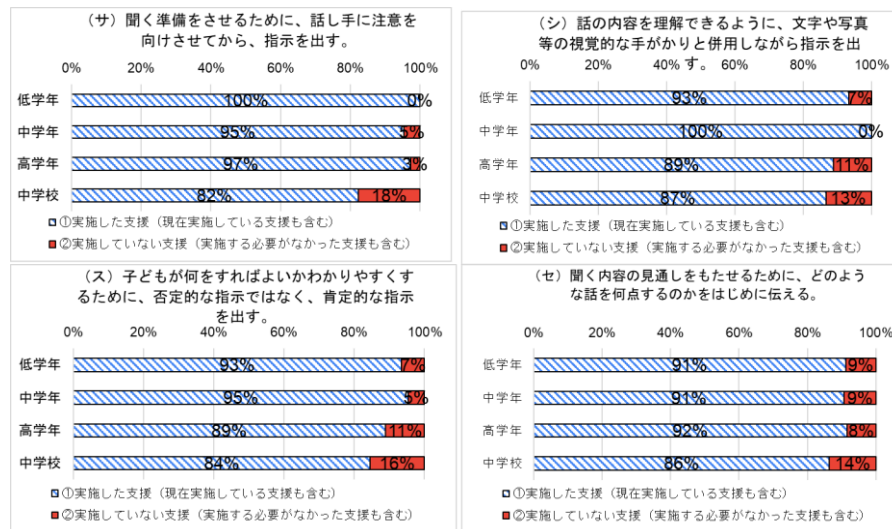
③ 「話す」 ことに関する支援



(ク) (コ) の支援は、中学校で実施率がやや低くなっている。発達段階においてのつまづきは、学年が上がるにつれて解消されることはあるが、発達障害の特性は、発達に即して改善されることはないことを認識しておく必要がある。中学校では(ク) (コ) とは、別の支援を実施しているため、実施率が低くなっている可能性がある。小、中学校においては、具体的支援のあり方や個別支援計画の扱い方について見直すとともに、特に【特別な支援を必要とする児童生徒】にとって必要な支援が確実に行われるよう連携を密に図ることが大切である。(ケ) の支援は、全学年において有効な支援であり定着している。

上記以外で実施された支援では、「スモールステップで話す機会をつくる」、「話し方の掲示、例示」など多くの支援が挙げられている。「話す」ことに関する支援効果は高く、有効であるため定着率も高いと考えられる。

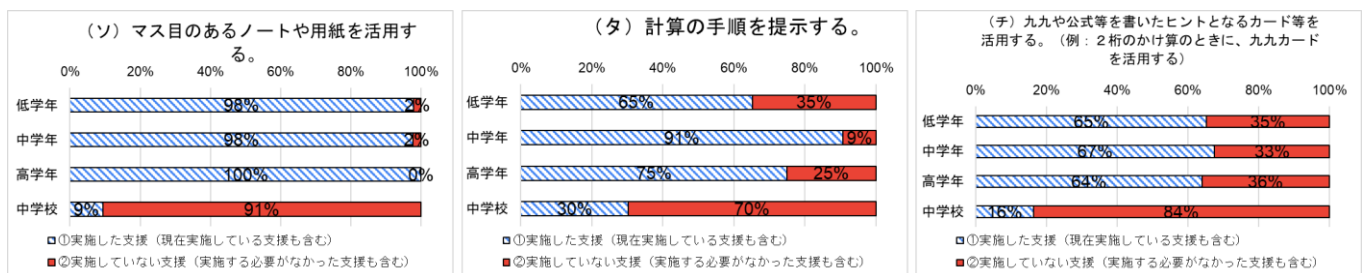
④ 「聞く」ことに関する支援



(サ)の支援は、中学校では、小学校と比べて実施率が低い。この支援は、教師が指示を出すときの基本となる指導方法であるため、中学校ではさらなる支援の定着が必要である。(シ)(ス)(セ)の支援は、全学年において有効な支援であり定着している。

上記以外で実施された支援では、「教師の話し方」、「聞く姿勢の視覚化」など多くの支援が挙げられている。「聞く」ことに関する支援効果は高く、有効であるため定着率も高いと考えられる。

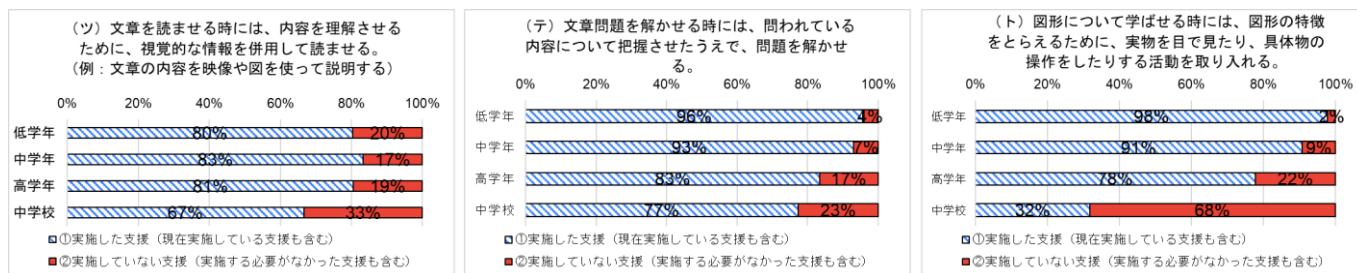
⑤ 「計算する」ことに関する支援



「計算する」ことに関する支援において、中学校での実施率が極端に低くなっているのは、数学科以外の教員も回答しているためである。教科によっては、授業の中で計算する機会がほとんどない教科もある。(ソ)の支援は、小学校において有効な支援であり定着している。(タ)の支援は、小学校では学年間で実施率に差が見られる。ワーキングメモリが低く、計算ミスが多い児童生徒にとっては、このような支援は「計算することができた」という体験を増やすことができる支援の一つとして認識する必要がある。(チ)の支援は、小学校では実施率が7割に満たない。計算することが苦手な児童生徒やワーキングメモリが低い児童生徒にとっては、手元で公式等を確認させることは有効な手立ての一つとして認識する必要がある。

上記以外で実施された支援では、「視覚支援」「計算機の活用」などの支援が挙げられたものの、支援例は少なかった。「計算する」ことに関する支援について、具体的な支援例を共有し、有効な支援を実施することが重要であると考えられる。

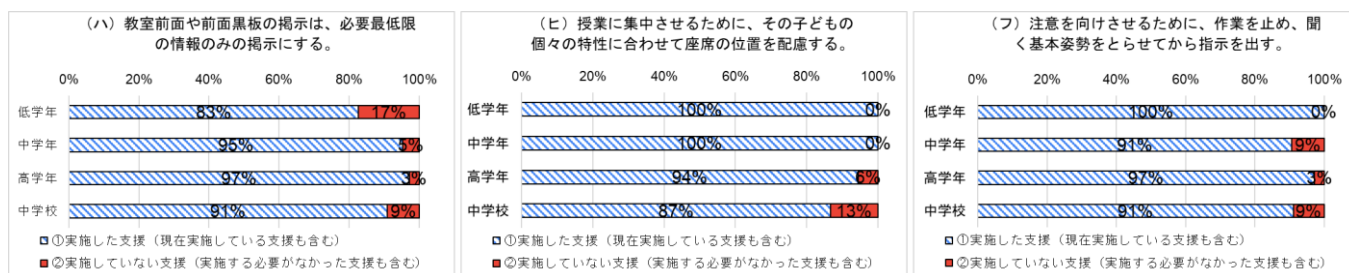
⑥ 「推論する」ことに関する支援



(ツ) の支援は、中学校で実施率がやや低くなっている。(ツ)とは別の支援を実施しているため、実施率が低くなっている可能性がある。小、中学校においては、具体的支援のあり方や個別支援計画の扱い方について見直すことが大切である。また、文章を読むだけでは内容を理解しにくい児童生徒にとっては、必要な支援が確実に実行されるよう校種間の連携を密に図ることが大切である。(テ)の支援は、全学年において有効な支援であり定着している。(ト)の支援は、高学年での実施率が低くなっている。また、中学校で極端に実施率が低いのは、教科による関連性のためである。立体など目で見えない部分が存在するものをとらえることが難しい児童にとっては、実物を見たり、触ったりする活動が効果的であるため、小学校高学年や中学校でも有効な支援の一つとして認識する必要がある。

上記以外で実施された支援では、「見本の例示」、「文章の内容を体験させる」などの支援が挙げられたものの、支援例は少なかった。「推論する」ことに関する支援について、具体的な支援例を共有し、有効な支援を実施することが重要であると考えられる。

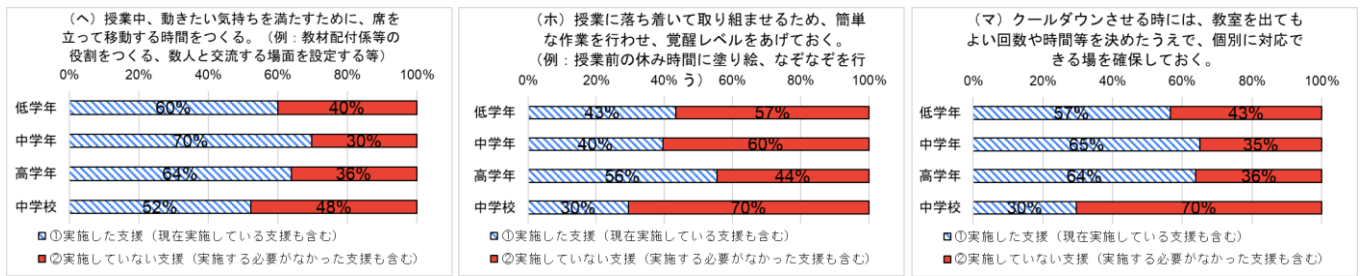
⑦ 「不注意」に関する支援



(ハ) の支援は、低学年での実施率が他の学年と比較するとやや低い。小学校に入学し、学校生活に対する不安や集団生活に不慣れな児童も多いため、学校や授業のルールなどをきめ細かく、丁寧に学ばせることが必要である。そのために、学習内容をわかりやすく視覚化(見える化)するために掲示物が多くなることも理由の一つであると考えられる。(ヒ)(フ)の支援は、全学年において有効な支援であり定着している。

上記以外で実施された支援では、「視覚教材の活用」、「パーテーションでくぎる」など多くの支援が挙げられたことから、「不注意」に関する支援効果は高く、有効であるため定着率も高いと考えられる。

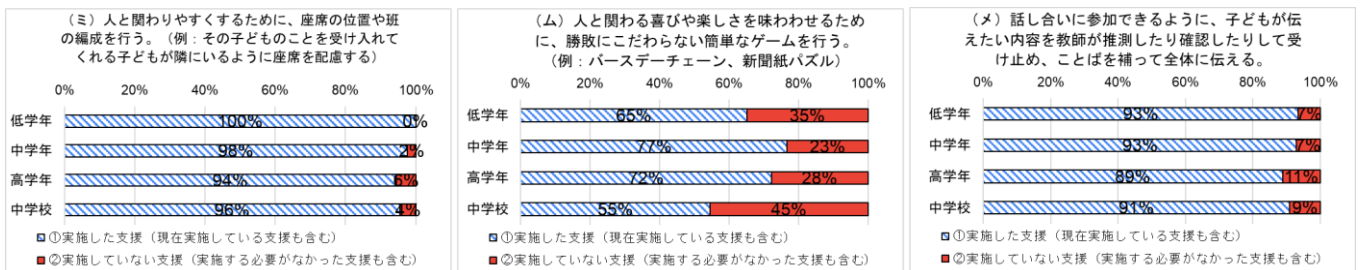
⑧ 「多動性」に関する支援



(ハ) の支援は、全学年において実施率が5～7割程度である。「多動性」に関する困り感がある児童生徒が少ないため、支援を実施する必要がない可能性もある。1時間の授業の間、じっと座って話を聞くことは、「多動性」の児童生徒にとっては苦痛である。席を移動するなどして活動の流れを変えることが、安心して授業を受けるための有効な支援の一つであることを認識する必要がある。(ホ) の支援は、小学校高学年では実施率が6割程度であるが、他の学年では5割に満たない。支援を必要とする児童生徒が少ない可能性もあるが、授業に集中できず立ち歩いてしまう児童生徒に対して、授業に向き合う時間を増やすための支援の一つとして認識する必要がある。(マ) の支援は、小学校では実施率が約6割、中学校では3割である。「個別に対応できる場を確保しておく」というハード面での支援であるため、学校としての教室環境や学習環境の整備が必要となる。

上記以外で実施された支援では、「アンガーマネジメント（自分の怒りの感情に対してどのように対処するのか）」、「教師の関わり方（褒め方）」等の支援が挙げられたが、支援例は少なかった。「多動性」に関する支援について、具体的な支援例を共有し、有効な支援を実施することが重要である。

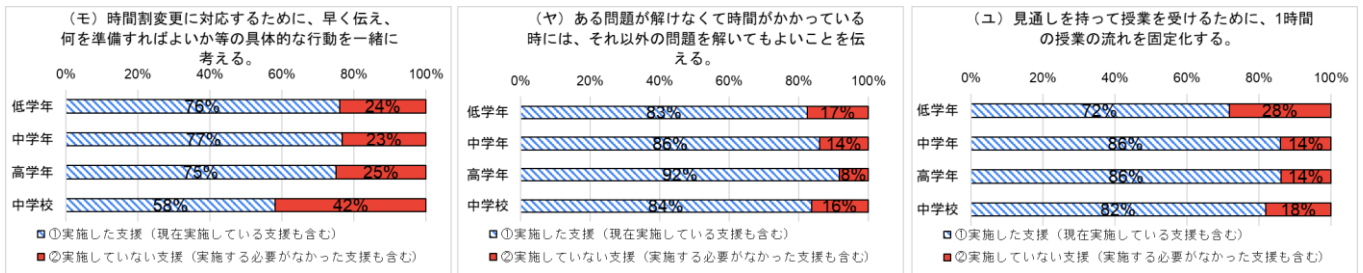
⑨ 「対人関係」に関する支援



(ミ) (メ) の支援は、全学年において有効な支援であり定着している。(ム) の支援は、(ミ) (メ) の支援と比べると実施率は低い。勝敗にこだわらぬあまり、対人関係でトラブルを起こす児童生徒もいるので、人と関わる喜びや楽しさを味わうことのできる“勝敗にこだわらない”簡単なゲームを考えておくことも必要である。

上記以外で実施された支援では、「自分や相手の感情を言語化、可視化する」、「教師が子どもと関係をつくる」など多くの支援が挙げられた。「対人関係」に関する支援効果は高く、有効であるため定着率も高いと考えられる。

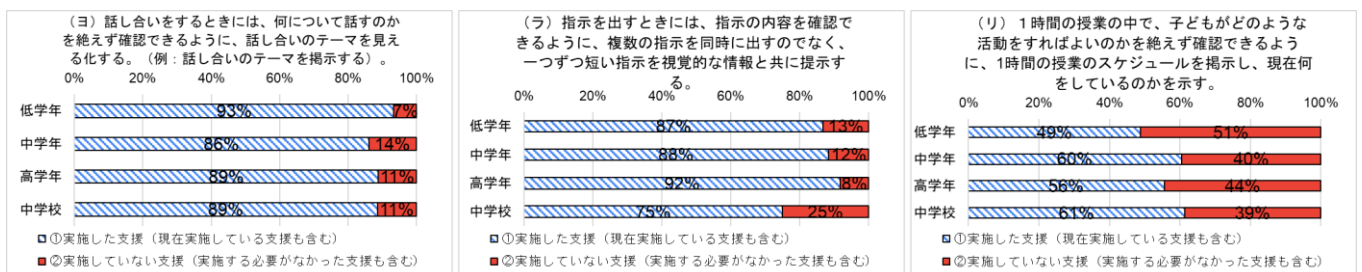
⑩ 「こだわり」に関する支援



(モ)の支援は、中学校で実施率が低くなっている。中学校では、教科担任制のため担任が長時間学級にいたることが少ないことも関係しているかもしれないが、時間割変更を伝えても行動に移せない児童生徒に対しては、具体的な行動を確認する支援が有効であるということを確認する必要がある。(ヤ)の支援は、全学年において有効な支援であり定着している。(ユ)の支援は、低学年での実施率がやや低い。1年生では授業の大まかな流れ(授業のめあて、探究活動、振り返り)は決まっているものの、細かい内容については固定されていない場合が多いことが理由の一つであると考えられる。

上記以外で実施された支援では、「見通しを持たせる」、「教師との関わり(褒める)」など多くの支援が挙げられている。「こだわり」に関する支援効果は高く、有効であるため定着率も高いと考えられる。

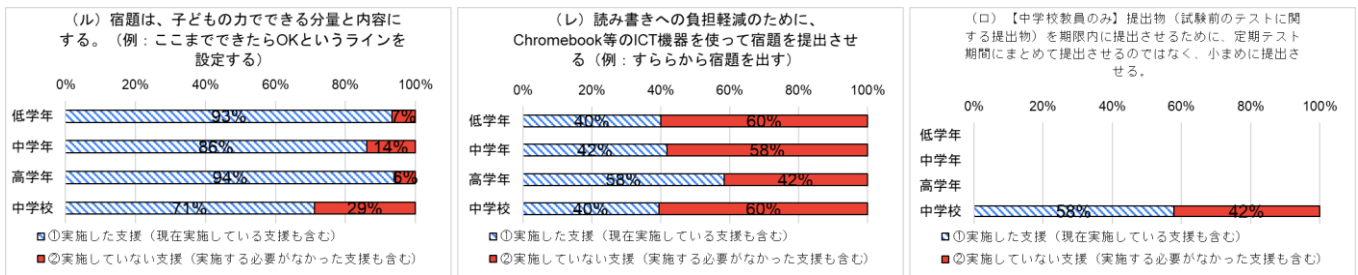
⑪ 「ワーキングメモリ」に焦点をあてた支援



(ヨ)の支援は、全学年において有効な支援であり定着している。(ラ)の支援は、中学校で実施率が低くなっている。聞くことによる情報の受け取りが難しい児童生徒にとって、一つずつ短い指示を出したり、見えない情報を視覚化(見える化)したりすることは、情報を正確に受け取るための有効な支援の一つであることを認識する必要がある。(リ)の支援は、小学校中学年以上では、実施率が約6割であるが、低学年では5割に満たない。授業の流れを固定化することは実施していても、それだけでは不十分な児童生徒に対しては、この支援は有効である。授業中に“今何をするべきか”がわからなくなる児童生徒にとって、見通しを持てることで安心して授業を受けることができるようになる。そのために、こうした支援をより定着させていくことが求められる。

上記以外に実施した支援は多種多様であり、特に効果のあった支援の中には「ワーキングメモリ」に焦点をあてた支援が多かった。ワーキングメモリに焦点をあてた支援がさまざまな困り感に対して有効であることが考えられる。

⑫「宿題や提出物（試験前のテストに関する提出物）」に関する支援



(ル)の支援は、中学校で実施率がやや低くなっている。中学校では、提出物に関する支援に弱さがあるが、約7割の教員がこの支援を実施している。支援は浸透しつつあるが、今後も引き続き実施率を高めていくことが求められる。小、中学校においては、具体的支援のあり方や個別支援計画の扱い方について見直すとともに、特に【特別な支援を必要とする児童生徒】にとって必要な支援が確実に行われるよう連携を密に図ることが大切である。(レ)の支援は、小学校高学年では実施率が約6割であるが、他の学年では5割に満たない。ICTを活用した支援方法も視野に入れながら支援を実施する必要がある。(ロ)の支援は、中学校の教員のみが回答する質問である。小学校では、毎日宿題や学習課題を出しているが、中学校では、試験前の期間にまとめて課題を出すために、【特別な支援を必要とする児童生徒】が困るといったケースがある。約6割の先生方がきめ細かく、丁寧に課題を出すような支援を行っているが、【特別な支援を必要とする児童生徒】が提出物を期限内に出す経験を増やす有効な支援の一つとして認識しておくことが大切である。

(ル)の支援以外にも「課題の量の調整」に関する支援を実施している教員は多かった。宿題や提出物が提出できない児童生徒に対して、「課題の量の調整」をすることの支援効果は高く、有効であるため定着していると考えられる。

⑬全体を通して

全学年において実施率が8割を超えた支援は、38項目中13項目あった。それらの支援は【特別な支援を必要とする児童生徒】だけでなく、全ての児童生徒にとって有効であると考えられる。

一方で、「計算する」ことに関する支援や「推論する」ことに関する支援の(ト)以外で、中学校での実施率が1割近く低下している支援が、38項目中8項目ある。小学校まで必要であった支援が、中学校に上がることで急に必要でなくなることは考えにくく、支援が行われていない可能性が考えられる。今一度、個別支援計画のあり方や扱い方を確認し、【特別な支援を必要とする児童生徒】にとって必要な支援が継続的に行われるよう連携を密にする必要がある。

(3) 効果のあった支援として回答いただいた支援（以下【効果のあった支援】）と効果のうすかった支援として回答いただいた支援（以下【効果のうすかった支援】）について

【効果のあった支援】について多数の回答が寄せられ、教員が多種多様な支援を行っていることが伺えた。効果のある支援は、個別支援計画等で次年度へと引き継がれることで、継続的に有効な支援を行うことができる。このことにより、守山市の特別支援教育は今後より一層充実していくと考えられる。

①テキストマイニングにより分析し、明らかになったことは以下のとおりである。

- ・【効果のあった支援】を、ワードクラウド¹によって視覚化すると、図1のようになり、キーワードとして「見通し」「合理的配慮」「明確化」の3点が挙げられる。

1点目の「見通し」に関する支援は、多くの困り感に対して行われていた。特に、「こだわり」「提出物」「ワーキングメモリ」に関する支援が多く行われていた。また、「見通し」に関する支援の中でも、「やることリストを作る」「やることの手順を示す」「いつまでにどれだけの課題をするのか計画をたてる」など多種多様な支援があった。

2点目の「合理的配慮」に関する支援は、主に「課題の量の調整」に関する支援で多く行われていた。教師や児童生徒自身、保護者と相談しながら課題の量を設定するなど多種多様な支援があった。

3点目の「明確化」に関する支援は、主に「不注意」「聞く」ことに関する支援で多く行われていた。「時間の明確化」「やることの明確化」「授業のめあての明確化」など多種多様な支援があった。

他にも「行動のモニタリング」「成功体験を自覚させる」「感情や音声などの情報を視覚化する」などの支援が挙げられた。これらの支援が【特別な支援を必要とする児童生徒】にとって有効な手立ての一つであると考えられる。

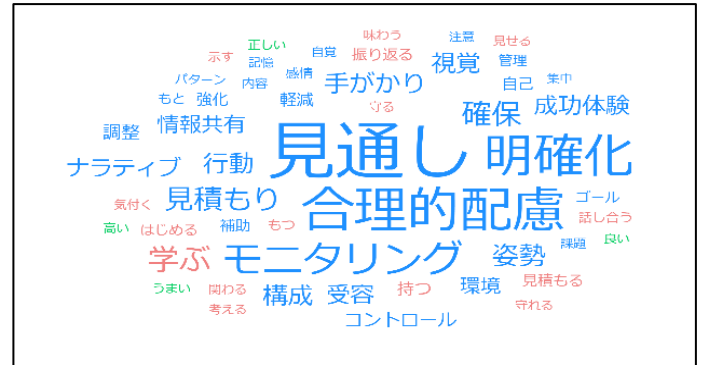


図1 ワードクラウド【効果のあった支援】

(【効果のあった支援】に関係の深い語句ほど大きく表示されている)

¹ どの語句がよく使われていたか、関係が深いかを視覚化すること

・【効果のあった支援】と【効果のうすかった支援】を対応分析²によって分析すると図2のようになった。図2から、【効果のある支援】では、「褒める」「認める」といった語句と関係が深く、【効果のうすかった支援】では、「怒る」という語句と関係が深いことがわかる。このことから児童生徒の困り感やつまずきに対して注意したり、叱ったり、不得意なことをなくそうとしたりするのではなく、できたことや得意なことを見つけ、褒めたり認めたりといったような受容的な関わりが大切であると考えられる。

- ②【効果のうすかった支援】の中にも「見通しを持たせる」ことや、「合理的配慮」など【効果のあった支援】でもあげられていた支援があった。例えば、【効果のあった支援】には「忘れ物をよくする児童には、持ち帰りチェック表を机に貼って、チェックさせるようにした。」という支援がある一方、【効果のうすかった支援】には「翌日の準備ができない児童に対して持ち物チェック表を作成した」という支援があった。このことから、多くの支援の有効性を認識し、【特別な支援を必要とする児童生徒】の特性に合わせて支援を考える必要があると同時に、個別支援計画などを活用し、次年度へと引き継ぐことが重要であるということを改めて確認できた。

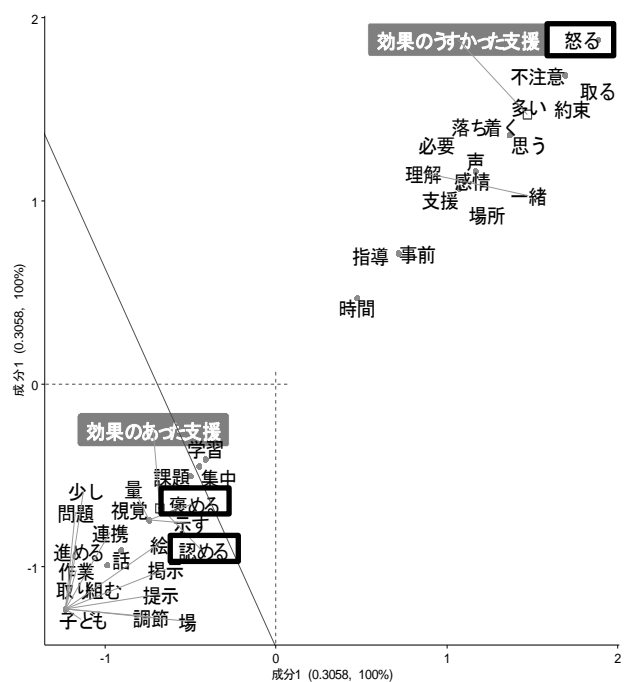


図 2 対応分析グラフ
 (左下にあるほど【効果のあった支援】に関係する語句で、右上にあるほど【効果のうすかった支援】に関係する語句である)

8 研究のまとめ

この研究を通して、守山市の現状として以下の6点が明らかとなった。

- (1) 全ての学年で多種多様な支援が実施されている。
- (2) 【特別な支援を必要とする児童生徒】だけでなく、全ての児童生徒にとって有効な支援が実施されている傾向にある。
- (3) 「褒める」「認める」等の受容的な関わりをする支援が有効である。
- (4) 【特別な支援を必要とする児童生徒】の特性に合わせて支援を実施する必要がある。
- (5) 支援によっては小学校で実施されていたが、中学校では実施されていない支援がある。
- (6) ICTの活用等、今後さらに充実させることが必要な支援がある。

9 おわりに

本研究を通して、通常の学級における【特別な支援を必要とする児童生徒】への支援のあり方について、本市の現状が少し明らかとなった。また、【特別な支援を必要とする児童生徒】に対してどのような支援が必要かについて、理解を深めることができた。

次頁には、通常の学級の担任が今年度実施した支援と今まで行った効果的な支援をまとめたものを資料として掲載したので、【特別な支援を必要とする児童生徒】の特性に合わせて支援を実施する際の参考としていただくと幸いである。

² 複数の要素に関して関係の深い語句について視覚化すること

資料：【特別な支援を必要とする児童生徒】に対する支援例

【特別な支援を必要とする児童生徒】によって効果のある支援は個々により異なるため、教員一人ひとりがたくさんの支援例を認識することは大切である。個別支援計画を作成する時や、【特別な支援を必要とする児童生徒】の特性に合わせた支援を行う時などに、参考にしてほしい。

「書く」ことに関する支援
○文章作成時の支援 例文や定型文、書く時のポイント、書き出し、テーマを示す。 マインドマップからキーワードを出させる、語群を作成する。 質問等によって児童生徒の考えを聞き出し、それを教師がまとめ見本を作成する。
○書く量の調整 ノートではなくプリントに板書させる。 穴埋め形式で板書させる。 決まった時数を書けないときは書ける文字数を相談して決める。 板書をコンパクトにする。
○なぞらせる、写させる 見本やうっすらと書いたものを用意し、それをなぞったり写したりする。
○板書を写しやすくする 板書を大きく書いたり、書いてほしいところに色をつけて印をつける。 板書のコピーを用意する。 ノートに写させる際に、何行空けるのか、何マス空けるのかをはっきり示す。
○書くことを別の手段にかえさせる 本人が話すことで書くことへの代用とする。
○板書する時間の確保 ノートをとる時間にゆとりを持たせたり、ICT を使って課題をいつでも閲覧可能な状態にする。
○パワーアッププリントを家庭の人と協力して取り組ませた。

QUIZ

この支援は、有効な支援だろうか？

文章を書くことが苦手な児童生徒に対して、毎日日記を書かせることで、文章が書けるように指導する。

「書く」ことが負担である児童生徒に対しては、とても辛い取組かもしれない。日記を書かせる指導を行うのであれば、日記を書くための支援（スモールステップで行う、口で話したことを ICT 等で文章化し、それを写させる等）を行い、日記を少しでも書くことができたことに対して「褒める」、「認める」といった指導が必要である。

「読む」ことに関する支援
<p>○音読をさせる</p> <p>家庭学習で音読の宿題を出す。</p> <p>おさんぽ読みをする。</p> <p>漢字の読みが苦手な子に対して漢字を口に出して読ませる。</p> <p>進出漢字を定着させる際に、読みに専念して何度も音読み訓読みの音読を行う。</p>
<p>○視覚支援</p> <p>文章の重要な部分にアンダーラインをつけたり、色をつけたりする。</p> <p>登場人物の気持ちがわかる文章と行動がわかる文章で色をつけて分ける。</p>
<p>○復唱させる</p> <p>教師が言った後に復唱させる。声をそろえて読ませる。</p>
<p>○ふりがなをふる</p> <p>新出漢字にふりがなをふる。</p> <p>文章にふりがなをふる時間を確保する。</p>
<p>○自分が書いた文章を一度読ませ、間違い（促音などの抜け）に自分で気づかせる</p>
<p>○ペア活動でのリーディング練習を行う</p>

「話す」ことに関する支援
<p>○スモールステップ</p> <p>全体の場で話す前に、ペアやグループで話をさせる。</p> <p>論破ゲームなどのゲームで話す機会をつくる。</p>
<p>○話し方の掲示、例示</p> <p>話し方のポイントや声のものさしの教室掲示。</p>
<p>○児童生徒の意見を聞く</p> <p>話す前に児童生徒の意見を質問形式で聞く。聞いた内容を教師が書きそれを見本として話す。</p>
<p>○学級づくり</p> <p>人間関係を考慮した班設定をし、安心して発言できる場となるように考慮する。</p>
<p>○オウム返しを使い、最後まで話せるよう促す</p>
<p>○困ったことがあれば付箋に書いて机に貼らせる</p>
<p>○質問に答えやすいよう、一問一答のような形で質問する</p>

「聞く」ことに関する支援
<p>○教師の話し方</p> <p>なるべく端的に話す。（教師が一度に話す時間は10分以内にする）</p> <p>聞くことに困難さがある児童の名前を呼んでから話し始める。</p> <p>目を合わせてから話し始める。</p> <p>指示の数を示してから話す。</p> <p>大事な話をするよと言ってから話す。</p>
<p>○ルールを作り徹底する</p> <p>活動の時間と聞く時間をはっきりと分ける。</p> <p>聞き方名人（聞く姿勢）を例示、掲示する。</p> <p>「グー○ピタ○ピン○ポン」（聞く姿勢）や「ビー○ダ○ま」（話を聞く意識付け）等、話を聞くための短い合言葉（掲示物を学年で統一）で意識させる。</p>

<input type="checkbox"/> 聞いたことの確認 内容がわかったら席を立つ。 聞いた内容を隣の人に説明する。 聞いたことをメモする。
<input type="checkbox"/> ソーシャルスキルトレーニングで上手な聴き方について学習する

「計算する」ことに関する支援
<input type="checkbox"/> 例の掲示、例示 計算方法を掲示しておく。 例題とその解答を用意したうえで計算問題をさせる。
<input type="checkbox"/> ゲームをしながら楽しく学習させる 友だちや自分の記録と競争させる。 九九の学習の時に、ゲーム性をもたせて学習させる。
<input type="checkbox"/> 視覚支援 おはじきなどの実物を用意して計算させる。 計算の順序を色分けしたうえで板書する。
<input type="checkbox"/> 計算機の使用を許可する
<input type="checkbox"/> さくらんぼ計算を取り入れて、くり上がり、くり下がりがわかるようにする
<input type="checkbox"/> 量ではなく、ポイントを理解したり、内容理解に重点を置いたりするなど、個別に簡単に確認する
<input type="checkbox"/> 計算式に説明文を書き込む

QUIZ

この支援は、有効な支援だろうか？

計算することが苦手な児童生徒に、計算に慣れてもらうため朝学習や家庭学習で計算問題を練習させる。

先ほどの「書く」ことの支援でも述べたとおり、計算することが負担となる児童生徒にとって、ただ単に計算問題をさせ続けることはとても辛い取組となる可能性がある。児童生徒が計算しやすくなるような工夫を取り入れたうえで、計算できるような支援が別に必要となる。

「推論する」ことに関する支援
<input type="checkbox"/> スモールステップで取り組ませる 例えば割合の学習のときに、文章の意味をとらえたり、出てきた数字が何を意味するのか考えたり、数直線で示したりと、推論するための手順を教えられるように気をつける。
<input type="checkbox"/> 見本の例示 例えを用いながら文章を説明する。 文章の内容をまとめたものを板書する。
<input type="checkbox"/> 文章の内容理解のために体験させる 文章の内容を実際に体験したり見たりできるようにする。（例えば水の流れについての文章のときに、実際に水を流してみる）

○パワーポイントのアニメーションを使うなどして、見通しが持てるようにする
○答えまでの道のりで、どの方法も間違いではなく様々な方法があるということを普段から伝える
○黒板に「○○」と書き、教師の話から何を伝えたいのかクイズ形式で予想させる

「不注意」に関する支援
○個別に声掛けを行う 集中するべき時などに声をかけたり合図を送ったりする。 集中できたときは褒める。
○机の上には必要な時に必要な物だけ出す
○教師の指示の出し方 なるべく端的に話す。 一度にたくさん指示を出すのではなく、一つずつ具体的に指示を出す。
○授業の活動を分割し、集中を持続させる 取り組む練習問題の量を少なくし、注意が持続できるようにする。 授業の流れを掲示し、一つこなすごとにスタンプを押す。 適宜小休憩をはさむ。
○視聴覚教材の活用 具体物の操作などを授業の中に取り入れる。 ICTを活用して、動画や写真を多く取り入れて授業を行う。
○集中して取り組んでいる場面をみつけて褒める
○一度注意したことは、児童生徒同士で注意し合えるようにする
○しなければならないことをできないことが多い児童には、家庭と協力して、毎日確認してできたかどうかのチェックをする
○パーテーションでくぎる
○授業の初めに役割を与える(簡単なクイズに答えてもらう、黒板に掲示物を貼りにきてもらう等)
○授業の中盤辺りまでは個人で取り組む活動より、ペア、グループで取り組む活動を軸にする

「多動性」に関する支援
○できたことを認める、褒める 立ち歩きがなかったらスタンプカードにハンコを押す。
○体を動かす時間の確保 タイマーを持たせて、外に出て遊んでよい時間を与える。
○振り返りをする時間の確保 毎日の振り返りをさせる。 1時間の授業が終わった時に、授業時の自分の行動を振り返り記入させる。
○アンガーマネジメント 腹が立ったときに、どうするのか約束を決める。 怒ったときは、○○まで行くという約束を決める。
○興奮時は向かい合わずに背後から肘を取り誘導する
○考えたことがすぐ口に出てしまう児童には、頭ごなしに叱ることのないように配慮する。(そこから児童同士の関係が悪くなる可能性があるだろうと想定しているから)
○気になることをすぐに口に出してしまう子に対しては、質問の時間は、教師の話のあとに時間をとることを伝える。(話を遮って質問が出ることがなくなった。)

○見てほしい！という気持ちの強い児童には、連絡帳に、今日よかった行動、がんばっていたことを書き、保護者に伝える

「対人関係」に関する支援

○自分や他人の感情を言語化、視覚化する

対人トラブルがあったときに、自分の感情を絵や言葉で確認しながら整理する。

自分の気持ちを伝えられるように、メッセージカードを作り、そこに言いたいこと、困っていることなどを書いて伝える。

感情を表情で表したカードを用意する。

○○ならできそうな気持は何%？など、割合を用いて聞き取る。

○教師の接し方について

話し方がよいときや、自分の思いを伝えられたときに褒める。

休み時間は可能な限り児童生徒と一緒に遊ぶ。

対人関係をうまく築けない児童生徒の良さを、日ごろから伝える。

自分の思いをうまく伝えられない児童生徒は、教師が代弁をする。

○自分の行動を振り返る時間の設定

トラブル後の振り返り。相手の気持ちについて考える時間の設定。

毎日の振り返りを一緒にいき、自己評価していく。

○見本を見せる

話し方や聞き方に関するポイントを掲示し、見本を教師が示す。

○学級づくりについて

一人ひとりの思いを大切に作る学級づくり。

係活動や班活動を活発にしたり、お楽しみ会をしたりする。

○じゃんけんなど、誰とでも関われる活動を授業の中に取り入れる。

「こだわり」に関する支援

○褒める、認める

無理強いをしない。まずは肯定する。

スムーズの対応できたときには、そのことを褒める。

問題が解けずに進めない児童生徒のそばに寄り添い、いつでも声をかけられる状態にする。

児童生徒の好きなキャラクターについて調べ、授業に取り入れたり、話をしたりする。

○見通しを持たせる

作業の流れを掲示し、何分までにどこまですすめばよいか掲示する。

手順をマグネットに箇条書きにして示し、できたらひっくり返す。全部ひっくり返すと絵柄が出てくる。

○できることをふやす

本人ができることできないことを相談しながら決める。

やることリストを作成し、評価する。

○時間割の変更について

そもそも変更をしないように心がける。

変更があるときはなるべく早く伝える。

○一日の流れを掲示し、簡単に学習内容についても掲示する

○話し合いの中で、妥協点○折り合いをつけるところを見つける

○児童のこだわりのある点を把握し、納得のいく方法を本児や保護者とあらかじめ相談し、対応する
○選択肢を2つ挙げ、選ばせるようにする。また、その際、「先生はこうしてくれると嬉しい」ということを伝える
○好きなデザインのノートの使用を認める

「ワーキングメモリ」に焦点をあてた支援
○見通しを持たせる やることリストの作成、提出物チェック表の作成。 1日の流れや授業の流れを視覚化する。作業の手順を視覚化し掲示する。 整理整頓できるようにファイルを使用させる。 これから学ぶことについて視覚教材を用いて説明する。
○課題遂行の振り返りをさせる やることチェックなどのチェック表はできたら消す。目標を決めて遂行できたか評価させる。 持ち帰りチェック表を机に貼って確認できるようにする。
○作業の段階を分け、全員が「ここまで」できたら進めるという方法で行う。
○連絡帳を見てもどこの宿題をすればいいかわからない児童に対して、宿題の場所に付箋を貼り、ノートを開いて目印をつける。
○ワーキングメモリの支援と同時に、やはり聞くことの支援も必要である。

「宿題や提出物（試験前のテストに関する提出物）」に関する支援
○課題の量の調整 最初から多く課題を出しておき、ここまでできたら○といったラインを児童生徒によってかえる。 課題の量を個別に調節し、授業時間でできなかった課題について、いつどれだけするかを本人と相談して進める。 学年間で宿題の量などを相談して出すようにする。
○家庭との連携 保護者と相談し宿題の量を調整する。 宿題を3回忘れたら家庭連絡する。
○できたことを褒める 提出物が期限内に出せなかった児童生徒が、遅れて提出物を出したときに怒るのではなくがんばったことを褒める。 課題の量を少なくしても、課題を提出できたら褒める。
○授業時間の終わりにワークを進める時間をとる
○数を数えて誰が出せていないかを児童生徒自身に確認させる
○がんばるところとそうでないところを区別し、明示する
○事前に提出物の完成度を確認し、期限内に終わらせるためのスケジュールを一緒に考える
○持ち物一覧表を渡し、忘れ物をなくす支援により、提出物のフォローを行う

全体に関わる支援
○教師が児童生徒と関係をつくる 休み時間は児童生徒と遊ぶ時間をつくり、心をリフレッシュさせる。 毎日の日記等にしっかりとコメントを書いて返す。
○情報共有を行う 家庭との連携。SSW との連携。校内の特別支援担当の先生との連携。軽度の知的をもつ子を特別支援へとつなぐために、いろいろな先生方と話し合い、連携した。 保護者とのつながりを密にする。
○できたことを褒める 児童生徒のよさを褒め、前向きな声掛けをする。 できなかったことよりも、できたことに目を向けて褒めることを意識して児童生徒と関わる。
○こまめな声掛け、スモールステップ、保護者との連携、肯定的なフィードバックなどの地道な積み重ね
○座席の配慮、班のメンバーの配慮をするためのアンケートの実施

【引用・参考文献】

- 末吉 美喜
テキストマイニング入門 (2019 オーム社)
- 梶谷 真弘
学級経営&授業のユニバーサルデザインと合理的配慮 (2018 明治図書)
- 佐賀県教育センター
小・中学校連携による、発達障害のある【特別な支援を必要とする児童生徒】の特性に応じた支援の在り方ー通常学級におけるだれもが学びやすい学習環境づくりの提案ー (2008)
- 文部科学省
通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査 (2012)
- 文部科学省
小学校学習指導要領解説 総則編 (2017)
- 文部科学省
中学校学習指導要領解説 総則編 (2017)
- 守山市健康福祉部子ども家庭局発達支援課
守山市発達支援システム基本方針 2021 (2021)

指 導 講 師	小西 喜朗 〔びわこ学院大学 教育福祉学部 スポーツ教育学科 教授〕
教 育 研 究 所	脇阪 久徳 中道 裕恵 浦谷 昌章
担 当 所 員	天沼 翔太